

## 西域発見の文字資料〔五〕

——各所分蔵の接合可能文書三種

### はじめに

世界各国に分蔵されている西域出土文献は、旧来、その一部が目録や小図版か、或いは不鮮明な写真図録の形で紹介されるのみであった。しかし、近年に至って、鮮明な写真図版や詳細な附随資料(法量、出土採集地、分類等の関連記録)が相次いで公表されるに至っている。こうした中で、各所に分蔵される西域出土文献の接合関係等が確認され、出土地の特定と共に、抄写された文書の内容の科学的考究などが進められるようになった。

本稿では、天理図書館、龍谷大学図書館、ベルリン国立図書館、大英図書館、及び武田学術振興財団附属「杏雨書屋」などに所蔵される西域出土の断片文書の中で、接合可能となった資料の二、三を抽出して、以下、経史の順に、その各々の考察を行うこととする。

### 【凡 例】

- ・ 文書番号、名称、図版番号等の表記は、原則として各所蔵機関の表記に従った。
- ・ 文書サイズ(cm)の表記は、掲載書の注記に従ったが、一部には筆者の推定値も添記した。
- ・ 釈文は原則として原写本の文字通りに表記したが、一部には通行字体も用いた。
- ・ 文書の断欠部分は「□」、「」印、残画部分は「□」印で表記した。
- ・ 断片の前後の欠失部分については前欠、後欠の表記を略した。

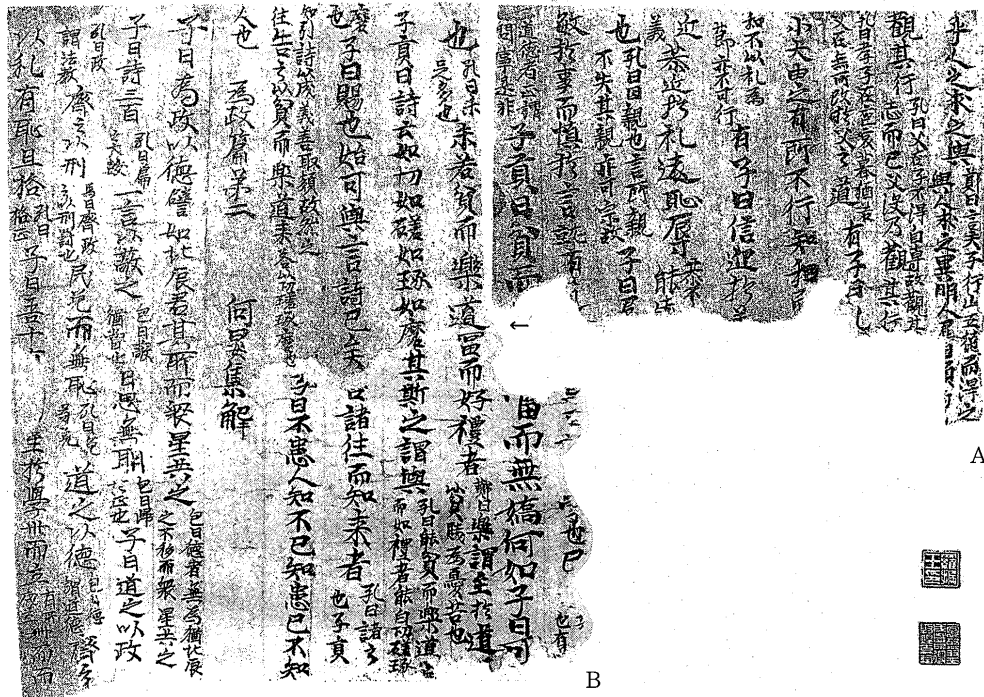


吐魯番盆地吐峪溝石窟遠景 (文書出土地・筆者撮影)

張  
娜  
麗

一 『論語集解』の接合断片

- ① 羅振玉旧蔵『貞松堂蔵西陲秘籍叢殘』「論語何氏集解殘卷」  
② 天理図書館蔵『論語集解』(222イ47「敦煌石室遺珠」)(24.7×18.3)



図版1 『論語集解』写本断片(↑:接合部分)

- A 『貞松堂蔵西陲秘籍叢殘』所掲写真  
B 天理図書館蔵文書写真

【釈文】

- 1 乎人之求之與鄭曰言夫子行五德而得之
  - 2 觀其行孔曰父在子不得自專故觀其
  - 3 父在無所改於父之道有子曰礼孔曰孝子在喪哀尊猶若
  - 4 小大由之有所不行知和而孔曰
  - 5 和不以礼有子曰信近於義義
  - 6 近恭近於礼遠恥辱
  - 7 也孔曰因親也言所親子曰君也
  - 8 敏於事而慎於言就有學也
  - 9 問事是非子曰貧而而無嬌何如子曰可也
  - 10 也足多也未若貧而樂道樂富而好禮者鄭曰樂謂至於道
  - 11 子貢曰詩云如切如磋如琢如磨其斯之謂與而如禮者能自切磋琢
  - 12 子曰賜也始可與言詩已矣諸往而知來者也
  - 13 往告之以義善取類然也子曰不患人知不已知患己不知
  - 14 人也為政篇第二
  - 15 子曰為政以德譬如北辰君其所而眾星共之包曰德者無為猶北辰
  - 16 子曰詩三百一言以蔽之包曰蔽曰思無耶包曰子曰道之以政
  - 17 謂法教齊之以刑馬曰齊政民免而無恥包曰免道之以德包曰德齊之
  - 18 以礼有恥且格子曰吾十有至於學世而立有所而而
- 〈以下「貞松堂本」後略〉

①は、羅振玉の『貞松堂蔵西陲秘籍叢殘』(以下「貞松堂本」と称す)所収の『論語集解』殘卷であり、この殘卷には、「学而篇第一」の後半部から「為政篇第二」の篇末にかけての『論語』本文とその集解の五十一行、

及び巻末の題記三行の計五十四行が残存している。<sup>〔注1〕</sup> その篇末には、次のような題記が見られる。<sup>〔注2〕</sup>

大中五年五月一日學生陰惠達受持讀誦書記

維木梁貞明

貞明九年癸未歲六月一日莫高鄉

この中の第二行の大字「維大梁貞明」の五文字は、一度書き出し、のち下部の余白の関係からか、墨で塗り潰して抹消し、次行に、「維大梁」の三文字を省き、やや文字を小さくして、「貞明九年癸未歲六月一日莫高鄉」と書き記されている。この状況からすれば、この卷子は、大中五年（八五一）五月一日に学生である陰惠達が書写したのち、七十二年の時を経て、学塾の者がこれを使用したためからか、その当時の年号・月日と郷名が「貞明九年（九三三）六月一日莫高鄉」と加筆されたように見られる。

この断片は、一九三九年刊行の羅振玉編『貞松堂藏西陲秘籍叢殘』中に、数多くの敦煌・吐魯番出土の『論語集解』の一断片として、「論語何氏集解殘卷」と題されて収められ、以後諸家の『論語』研究の素材となっており、このため、敦煌・吐魯番出土の『論語集解』の集成書とも言うべき『敦煌《論語集解》校證』<sup>〔注3〕</sup>などでは、この断片が最大限に利用されている。しかし、この断片は、羅氏の編刊時には、已に冒頭部から第十七行に及ぶ部位の下半部が欠けていたこともあり、本文研究は、この欠失部分を他本より補って進めざるを得ない状態となっていた。

ところで、この欠失した十七行のうちの十行分の断片が、最近、天理図書館の所蔵品の中から新たに確認された（以下「天理本」と称す）。天理大学附属天理図書館は、学術振興のために、数多くの古文書、善本を蒐集し、

整理、公刊を進めて来ており、敦煌・吐魯番出土文献の収集にも力を注ぎ、『般若波羅蜜多心經』、『太玄眞一本際妙經道本通微品第十』など、貴重な仏典や道書類の典籍のほか、その他の断簡、零墨も所蔵する日本有数の古書・古文書所蔵機関である。<sup>〔注4〕</sup>

上述の天理図書館所蔵の『論語集解』断片は、「石室遺珠 彝齋秘笈」と題する表装済みの冊子中に他の五片の文書断片と共に収められている。「石室遺珠 彝齋秘笈」の冊子はその扉の左端に、陶祖光（号北溟 金石・書画家）の筆になる貼り込み題簽があり、そこには書名（単行・隸書）と壬申年の次の識語（双行・楷行草書）が記されていて、その行末左には「陶北溟」との篆体の朱印が捺されている。『論語集解』の断片はこうした冊子劈頭の第一葉に貼付されている。

「莫高碎壁 伯耆唐寫論語等卷真天壤法寶愛」  
爲書此壬申端陽後陶祖光北溟識

本断片は、「学而篇第一」の後半下部の六行とその後接の「何晏集解」との文字の「集」字の下部の残画と「解」字、及び「爲政篇第二」の前半下部の四行（何晏集解の文字も含む）、併せて十行を残すものであり、前掲の「貞松堂本」に欠失した第8～17行の下半部に該当する遺品である。

「貞松堂本」と「天理本」との断裂面は十全に契合する（図版1参照）。

「貞松堂本」と伝本との文字の相違に関しては、『敦煌《論語集解》校證』に詳細な校異が見られるため、ここでは、これについての言及を控え、②の「天理本」に関して、同一個所を含む敦煌本の P. 2604、P. 2618、P. 3193（但し、P. 2604 の前半、P. 3193 の後半の当該部は欠失している）をもって校異し、文字の小異を記しておくこととする（数字は当該部分の行數。一の左は「天理本」、右はそれ以外の P. 2604、P. 2618、P. 3193 の何れかに残存する

文字)。

9「嬌」―「驕」、10「禮」―「礼」、11「如」―「好」、11「白」―「自」  
敦煌出土の各写本間にも文字の相違が見られる『論語集解』の実態は如何様であったのであろうか。ここで文字の異同を一瞥すると、先ず、9行目の扁の異なりがあり、10行目の字体の繁簡の別があり、第11行中の「如」と「好」、「白」と「自」の相違などが確認される。しかし、これらは恐らくは書写時の略化、及び単純な錯誤で、特に「白」は「自」の一面を欠く字形であるため、誤写されたものであろう。「天理本」には、こうした誤写と推定される文字の異同のほかに、第10行の集解中の「鄭曰樂謂至於道」の「至」字のように、唐代写本と今本との相違が顕在化する重要な個所が認められる。この「至」字は、現存刊本の多くは「志」に作っている。「至」と「志」字の相違については、『敦煌《論語集解》校證』にも、底本のP. 2618' P. 3193' 及び諸刊本をもって次の小文が綴られている。

「至」, 伯三二九三號及刊本均作「志」, 邢疏亦云「樂謂志於善道」。  
字當作「志」, 底本誤。」

ここには、敦煌本のP. 3193も諸刊本も「志」に作り、宋代の邢昺の注疏も「樂謂志於善道」と云っているのので、「至」に作る底本のP. 2618が誤っている、との旨が述べられている。しかし、この「天理本」も含めたP. 2618' P. 3193に見られる「至」字からすれば、唐代から「至」字をもつテキストが存在したことが明らかとなり、また、かなりに道学的な用字である現行本の「志」字の再考が迫られる結果が導かれるのである。「貞松堂本」の欠失部位を補足する「天理本」は、『論語集解』の用字を確認し、『論語』本文の攷読を進める上からも、極めて重要な資料と認められる。

## 二 『論語』鄭玄注の断片群

① 『西域考古圖譜』下巻 經籍(1) (1)唐鈔論語孔氏本鄭玄注断片(吐峪溝)(22.0×18.0)

② 『恭仁山莊善本書影』(六十八)「鄭註論語殘簡」(10×12.5)

### 【釈文】

1 「以薪宰夫和之齊之」也

2 「如鄉人皆惡之何如子曰未」

3 「惡之人皆好之多所好入皆惡之多所惡善人子」

4 「道不悅及其使人器之小人難事」

5 「不以道則悅及其使人求脩焉子曰君子泰而不驕小人」

6 泰謂威儀矜莊驕謂慢人自貴子曰割穀木訥斯近仁矣劉謂強志不屈貌毅強斷決貌訥認於言此四者皆

7 加文也則子路問曰何如斯可謂之士矣子曰切々思之怡

8 順貌怡々和協貌朋友切々思之兄弟怡々如子路好勇性近

9 七年亦可以即戎矣即就也戎兵也天以七紀滿其七數恩愛足以著

10 人戰是謂棄之不教人戰者謂人素戰士無致死之心必

11 論語憲問第十四 孔

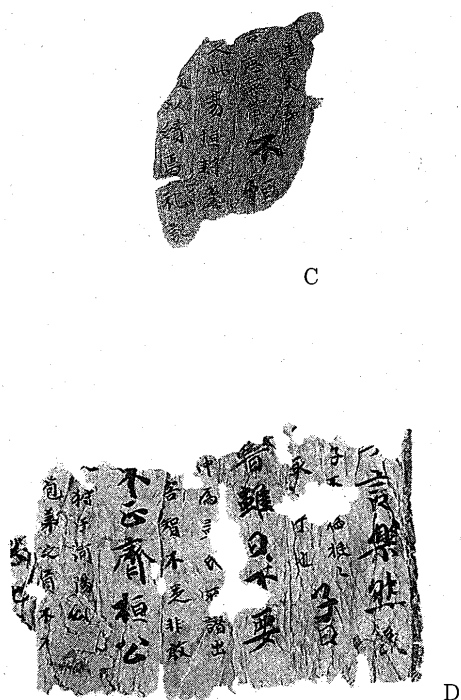
12 憲問恥子曰邦有道穀邦無道穀恥

③ 『西域考古圖譜』下巻 經籍(8) (6)唐鈔論語孔氏本鄭玄注(子路)断片

(吐峪溝)(5.0×3.5)

1 「言惡無常不恒」

2 「之此易恒封文」反以續焉礼記



图版3 『論語』鄭玄注写本断片 ②

### C 『西域考古圖譜』所掲写真

D 『斯坦因第三次中亞考古所獲漢文  
文獻』所揭写真

④ OR. 8212/632 背 Toy. III. 032 (1) 唐寫《論語·憲問》(5.7×8.8)

1 ☐ ☐ 其言樂然後 ☐

2 ☐ 子不 ☐ 爲挺 ☐  
取 ☐ 子也 子曰 ☐

3 ☐ 魯雖曰不要 ☐

4 ☐ 仲爲孟氏所黷出  
害智不足非敢 ☐

5 ☐ 不正齊桓公 ☐

6 ☐ 狩於河陽 ☐  
苞茅之貢不入 ☐

7 ☐ 忽 ☐ 死 ☐ ☐

「其の論語などは既に今日に於ては全く世の中に存しない所の一種の注である。兎に角唐代にあつた所のある注の見本として貴重なものである。」

存在し、研究が進捗しなかったところがある。

①③の二点は、その注記などによれば、共に大谷探検隊が、第二次中央アジア探検時の一九〇八～〇九年頃、吐峪溝（トヨク）で獲得し将来したものとなる。①③の原品は、龍谷大学に現蔵され、その写真は『西域考古圖譜』下巻、及び『大谷文書集成』参（本書に於いて新たに、八〇八八（裏）、八一〇（裏）と付番されている）にそれぞれ図版として掲載されている。②も、①③との関連性などからすれば、大谷探検隊が吐峪溝から獲得したものの一部と推測される。但し、この②は、諸事情により、『西域考古圖譜』が刊行される以前に、内藤湖南氏の所蔵となり、湖南氏没後、一時大阪府立図書館の保管を経て、現在、（財団法人）武田学術振興財団の所蔵に帰している。直接的に接合可能な①②の断片（図版2参照、①②を接合した後の全体の寸法は、24.1×19.7 cm になると見られる）については、筆者が、小稿を綴って口頭発表し、また論考を行っているが、③④については、一連の断片ではあるが、直接的な接合品でない関係上、先稿には言及を控えていた。このため、ここで改めて①②と共に、この③④の両断片を加えて小文を記しておくことにする。なお、②については、原文書の現在の所蔵先である武田学術振興財団附属「杏雨書屋」で実見させて頂く機会を賜ったため、そこで得た新知見なども添記しておくこととする。

③は、僅か二行を遺存させる極小断片であり、その写真が、①の収載される『西域考古圖譜』下巻の別部分の「経籍（8）(6)」に収められている（図版3C参照）。池田温氏は（下記の④も含め）①と共にこのものを用いてその紙背にある「論語鄭注子路・憲問篇残文」にもとづき、残墨を判読しその表面に記された「西州籍」の原文の内容を確定している。<sup>〔注10〕</sup>

④は、所謂「スタイン第三次中亜探検による収集文書」で、その注記の

番号などから、スタインが一九一四年一月頃に、吐魯番の吐峪溝の第三遺跡で獲得したものであり、原品は現在大英図書館東方部に保存されている。この④の断片に関しては、曾て陳国燦氏が文書の録文と共にその内容を簡潔に紹介しているが、この紹介は文字のみで図版の載出を行わぬものであった。同氏は、本断片について、「唐寫本《論語集解》憲問篇「殘片」とした上で、さらに「案本件爲何晏集解本」と記している。その後、『斯坦因第三次中亞考古所獲漢文文獻』の刊行によって、原文書の姿が明らかとなり、その詳細が確認できるようになった（図版3D参照）。同書では、池田温氏の考証を踏まえながら、本断片を大谷八〇八八、大谷八一〇と同一断片であると指摘している。しかし、「惟本件能否視作鄭注、尚存疑點。」と、本断片を鄭注本と見做すことに疑義を呈している。本断片、及び上記の大谷文書の両断片の紙質などの詳細は不明であるが、両断片は、裏面の「鄭注論語」の内容ばかりでなく、表面の内容、すなわち「唐開元一六年西州籍」（以下「西州籍」と称す）そのものも一致する上、原写真図版から確認される書体、筆致、紙襞、断裂の状態などもすべて吻合するのである。こうした状態からすれば、この三片は同一文書の断裂品であり、その裏面に書かれた文字は、共に「鄭注論語」遺文であると見られるのである。

④は、「憲問篇第十四」の「其言樂然後」～「不正、齊桓公」の正文十七字と、これらの注文三十一字、計七行を残している。正文については、通行本と異同が見られないが、注文に関しては、鄭注そのものが遺存していないため、現在のところ、文字の異同の判別はできない。

ところで、上掲の①④の諸断片の裏面は、悉く「鄭注論語」の内容であることが明らかとなるため、それらの表面も「西州籍」が書写されたものと見做すべきこととなる。①③④文書の表面の内容は、已に確認される

ので問題はないのであるが、②の表面については、これを示した写真図版が何れの著作にも見られないので、確認ができなかった。<sup>〔注13〕</sup>②の断片は、早く内藤湖南氏の所有になり、昭和十年三月に『恭仁山莊善本書影』<sup>〔注14〕</sup>中の一点として写真図版が載出されたが、写真図版は裏面の「鄭注論語」のみであり、また、この断片がその後武田科学振興財団の有に帰したのち、一九八五年五月に『新修恭仁山莊善本書影』が刊行された際にも、その表面の内容、すなわち、「鄭注論語」の紙背文書の上載はなかったのである。

②の文書断片が接合する①の左下部を仔細に観察すると、この部分は、墨書下の白地となる部分で、元来、文字が記されていなかった可能性が高いように見られる。この位置に嵌入すべき②、すなわち「鄭注論語」の背面には、墨書があったのであろうか、なかったのであろうか。この問題については、永く解決の糸口がなかったが、過日、その所蔵機関である武田科学振興財団の高断を得、その附属の「杏雨書屋」で当該文書を実見することが叶い、その確認を果たすことができた。

②の「鄭注論語」断片は、他の五つの文書断片と共に卷子に貼り込まれて保存されている。この卷子の外題には、「吐魯番出土論語鄭注断簡<sup>并経籍叢残</sup>」との貼り込み題簽が見られる。「鄭注論語」断片は、この卷子の冒頭の部分に他の断片と一連に貼付されているため、その紙背の様子は表面からは窺うことが不可能な状態となっている。「杏雨書屋」の関係の方によれば、文書断片六点は当初より卷子装貼り込みの状態で「杏雨書屋」に入ってきたよしである。そこで「杏雨書屋」の関係の方々のご支援を得て、この「鄭注論語」断片を貼り込む卷子に光を当ててその背面から透し視たところ、②の紙背部に墨痕が確認できなかったのである。②の断片が嵌入される①の部位の周囲の状況からしても、②の「鄭注論語」の背後には当初か

ら墨書がなかったようである。

なお、①②の断片の校勘については、金谷治、王素両氏の著書、及び拙著の関係箇所を参照して頂きたい。<sup>〔注15〕</sup>

### 三 『史記』『漢書』両面書写の断片群

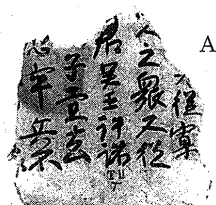
① Ch938r (TII T1132) 『漢書』卷40「張良列傳」(7.5×7.4)

#### 【釈文】

- 1 其中小不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>
- 2 巴蜀之饒北有<sub>二</sub>
- 3 師諸侯有變順流<sub>二</sub>
- 4 都關中良從入關<sub>二</sub>
- 5 爭未能得堅決<sub>二</sub>
- 6 <sub>二</sub>

② Ch938v (TII T1132) 『史記』卷67「仲尼弟子列傳」(7.5×7.4)

- 1 <sub>二</sub>身從<sub>二</sub>
- 2 <sub>二</sub>人之衆又從<sub>二</sub>
- 3 <sub>二</sub>君吳王許諾<sub>二</sub>
- 4 <sub>二</sub>子貢去<sub>二</sub>
- 5 <sub>二</sub>應卒兵不<sub>二</sub>
- 6 <sub>二</sub>



図版 5 『史記』卷 67「仲尼弟子列傳」写本断片

A Ch 938v (TH T1132)

B 『西域考古圖譜』所掲写真

図版 4 『漢書』卷 40「張良列傳」写本

A Ch 938r (TH T1132)

B 『西域考古圖譜』所掲写真

四十「張良列傳」、その裏には『史記』卷六十七「仲尼弟子列傳」が書写

上記の両断片は、表裏ともに墨書が見られるもので、表には『漢書』卷

9 □□□□

8 吳王聞之去晉而□

7 人擊之大敗吳師越王聞□

6 果以兵臨晉与晉人相遇□

5 与齊人戰於艾陵大破齊□

4 奈何子貢曰修兵待之晉君□

3 越乱之矣与齊戰勝必以□□

2 先辦不可以勝敵今天□

1 □□謂晉君曰□□□□

④ 『西域考古圖譜』下卷 經籍 (5) (1) 史記仲尼弟子列傳 (庫木吐喇)

9

8

7

6

5

4

3

2

1

③ 『西域考古圖譜』下卷 經籍 (5) (2) 漢書張良傳 (5) (1) 之裏面

□□侯善畫計上信用之呂后乃使建□

□□高枕而卧良曰始上數在急困之中幸用□策

□□等百人何益呂澤強要曰爲我畫計良曰此難以

□□皆以上嫚侮□故逃匿山中議不爲漢臣然上高此

□□辭安車曰使辯士固請宜來以爲客時從入朝□

□□卑辭厚禮迎此四々人々至客建成侯所漢十

□□將以存太子將兵事危矣乃說建成侯

□□上定天下梟將也今

□□侍御趙



されている。①②は、現在ドイツのベルリン国立図書館に所蔵される文書で、その写真図版は、西脇常記氏編の目録『CHINESISCHE UND MANJURISCHE HANDSCHRIFTEN 3』の Tafel 6 に掲載されている<sup>〔注17〕</sup>（図版4A、5A参照）。③④は、大谷探検隊将来の文書で、現在の所在は不明であるが、写真図版は『西域考古圖譜』下巻「経籍」（5）に載出されている<sup>〔注18〕</sup>（図版4B、5B参照）。この両断片は、それぞれ、ドイツ、日本の両国に将来され所蔵されるに及んではいるものの、表裏各面の筆書の特長や書写された内容などからすれば、明らかに同一文書の断裂したものであることがわかる。この文書断片については、既に、西域文書研究家で北京大学教授の榮新江氏が、一九九六年にベルリンに滞在した折に注意を払い、<sup>〔注19〕</sup>のちに文を綴っているが、図版等をもってこれを詳説していないため、ここで改めてこれを記しておくこととする。

①②の各表面に記される『漢書』の文字には、やや肉細の速書された楷行の書体の混じる文字が見られ、また各背面に記される『史記』の文字には、表面よりもやや大きな肉太の行書体の文字が見られる。この表裏の各面は、紙面に野線の有無の違いがあり、表面のみに淡墨で天地、行野（幅11～13mm）、（元来の用紙の天地高は写真図版をもとに推計すると約27.5cmになる）の線が引かれていて、両面それぞれ14行ずつの文字が遺存している。①の文書は、所蔵番号によれば、一九〇四年十一月頃にル・コックをはじめとしたドイツ第二次調査隊が吐魯番の「吐峪溝」（トヨク）で獲得し将来したものであることがわかる。②の文書は『西域考古圖譜』下巻の注記には、出土地が「庫木吐喇」（クムトラ）と標記されている。①②の文書は、同一の内容、筆跡の文書でありながら、その出土地を異にしているのであるが、断裂して①②の小断片となったと見られる零細な文書が、遙かに離

れた土地、すなわち数百kmも隔たった場所から別々に出土するといったことは考えられぬため、両調査団の何れかが、その出土地の注記を誤り記したように推測される。<sup>〔注20〕</sup>

敦煌の出土の史籍類の文書、殊に『史記』『漢書』は、他のものと比べ、出土数は少なく、とりわけ『史記』の写本は、敦煌からは、僅かにP. 2627（裴駰『史記集解』）の出土があり、吐魯番からは、上記の写本とCh734（TH T1578）（『史記』卷68「商君列傳」。西脇常記氏の目録のNo. 67による）の断片が出土しているだけである。

吐魯番からの『漢書』写本の出土例は、上記のもののほかに、一九八〇年に吐魯番（トルファン）市東郊四十五kmほどの地にある柏孜克里克（ベゼクリク）千仏洞から発見された六朝期の写本とされる「西域傳」（80TB: 01a）の断片（存4行、30字）の報告があるのみである。<sup>〔注21〕</sup>こうした中で、本稿で紹介する、西域出土文書断片は、紙面の表裏に史書二種（『史記』『漢書』）を書写するという、類例の極めて稀な形をもっている。

①大谷文書については、内藤湖南氏が「西本願寺の發掘物」の文中でその内容について言及をしている。また、羽田亨氏も大谷探検隊が将来し『西域考古圖譜』に収載した経籍書断片も含めて、『史記』『漢書』にかかわる断片について、次のように小文を綴っている。

「経籍の部は十葉、(1)唐鈔論語孔氏本鄭玄注の如き珍重なるものをはじめ、(2)唐鈔尚書孔傳同春秋左氏傳、(3)六朝鈔本舊注孫子 (5)史記仲尼弟子列傳、漢書張良傳等が主なるものであらう。たゞ之が悉く寸餘の断片で尺に及ぶものは一二にすぎないのは惜みても餘りあることである。」<sup>〔注22〕</sup>

羽田氏は、断片の学術的価値を強調する一方、そのものが小片であるこ

とを惜しんでいるわけである。

なお、大谷探検隊将来文書の一部である『西域考古圖譜』所掲文書の大半は、現在龍谷大学に保存されていて、小田義久氏らによる再編纂になる『大谷文書集成』<sup>〔注28〕</sup>参に再収されるに及んでいるが、この『史記』『漢書』の書写断片については、再編号もなく、図版が再収されることのないまま現在に至っている。現在所在不明となっているこれらの文書断片の出現を願いながら、残存文字の採録と通行本との校異をおこなうと、次のような箇所での文字の異なりが確認される（数字は当該部分の行数。上は写本、下は中華書局校点本）。

- ① 5 決—決
- ② 1 寡—寡 4 子貢去—子貢因去
- ③ 3 強—彊 4 嫚侮—嫚侮 4 逃—逃 4 議—義 5 辯—辨 7 太子—太子太子
- ④ 3 乱—亂 3 与—與 3 戰勝—戰而勝 4 修兵待之—修兵休卒以待之

『漢書』『史記』の史書二種を表裏に書写するこれらの遺墨は、通行本と比較べ、古今字、異体字等の相違のほか、④4の「修兵待之—修兵休卒以待之」のようにかなりの違いを留めていることである。なお、唐の顔師古は、③4の「嫚侮—嫚侮」について、「嫚與慢同。侮—侮、古侮字」との注疏を遺している。

## むすびに

西域の地——敦煌・吐魯番などから出土した古代の文字資料は、出土したのちにも数寄な運命に晒されながら、零細な残欠や断片として世界の各

地に収蔵されるに至っている。元来、完全なものの一部分であったこれらの断片や残欠には、前接、後継する部分が何処かに存在している可能性がある。これらのもののへの綿密な追跡や調査から本来の文書の全体像が復元され、西域出土文書の研究が進められて行くに違いない。本稿は、筆者のささやかな試みで確認された各地に分蔵される可接文書等を小致したものであるが、その各々の断片文書は、接合することによって、その価値を倍加することがわかったのである。

## 〔注〕

- 1 「貞松堂本」につき、紙面の都合で「天理本」と相応する1～18行のみを採録し、その他は暫時省略した。
- 2 この「貞明九年」は、すなわち「龍德三年」のことである。梁朝となっていた中原の地では、末帝の「貞明七年五月」に「龍德元年」と改元され、こののち、「貞明」の元号は使われていないが、遠僻地の西域では、なお「貞明」の元号を継続して使用していたようである。こうした状況は、S. 2614『大目乾連冥間救母變文並圖』一卷末の題記（貞明七年）、P. 2808『百行章』跋尾（貞明玖年）などにもその類例が見られる。
- 3 李方 録校（敦煌文獻分類録校叢刊）『敦煌《論語集解》校證』江蘇古籍出版社 一九九八年一〇月
- 4 天理図書館所蔵の敦煌・吐魯番文獻については、榮新江『海外敦煌吐魯番文獻見知録』（江西人民出版社一九九六年六月 204～212頁）、及び王三慶『日本天理大學天理圖書館典藏之敦煌寫卷』（『第二屆敦煌學國際研討會論文集』民國八十年六月所収）の各書をそれぞれ参照されたい。
- 5 前掲注3書40頁。なお、李方氏はP. 3163も「志」に作るとしているが、筆者の確認したところでは、当該の個所は「志」ではなく、墨の滲みはあ

るものの、文字の下部を「土」に作る「至」字である。

- 6 池田温『中国古代籍帳研究』（東京大学出版会 一九七九年三月）251頁の

「三九 唐開元一六年（七二八）西州籍」を参照。

- 7 内藤湖南「西本願寺の發掘物」（『内藤湖南全集』第十二卷 筑摩書房 昭和

四五年六月 215頁。この文は、明治四三年八月三十一日「大阪毎日新聞」

初出）。なお、羽田亨氏も①③の両断片について、他の經籍断片と共に、

「經籍の部は十葉、(1)唐鈔論語孔氏本鄭玄注の如き珍重なるもの…」（『西

域考古圖譜』（『史林』第一卷 第二號 大正五年一月所収）。のち『羽田博

士史学論文集』下巻 言語宗教篇 557頁に再収）と述べている。

- 8 大谷探検隊の獲得した文書類は上海を経由して、大連に送られる間、その

一部が巷間に流出したらしく（前掲注4の榮新江書158頁も参照）、その中

のものが、上海の中国書店の某氏、及びその某氏と関わりがあった博文堂

の原田悟朗氏等の手を経て、日本にも流入した如くである。この詳細につ

いては、後日小致を記す予定である。なお、先刊の拙著（汲古叢書66）

『西域出土文書の基礎的研究—中国古代における小学書・童蒙書の諸相—』

（汲古書院 二〇〇六年二月）327頁では、湖南氏所蔵の『論語』鄭注の断

片について、大谷文書整理に関わる間に遺留された可能性もある旨を小述

したが、その後の調査により確認された事柄によれば、湖南氏の蔵品は、

上海で散じた大谷探検隊獲得品中の一つである可能性が高い。

- 9 注8拙著324～329頁参照。この素稿は、二〇〇五年八月二七日に「中国新疆

吐魯番国際學術研討會」にて口頭発表をしたもので、のちにこれを補筆し

て本論の一部とした。

- 10 表面の内容、及び図版写真については、前掲注6書 251頁「三九 唐開元

一六年（七二八）西州籍」を参照。なお、同書所掲の大谷八〇八八図版は、

『西域考古圖譜』所掲の写真そのものではなく、『圖譜』刊行以降の某年に

龍谷大学で撮影されたもので、原資料の右下部を欠いたものを使用してい

ると見られる。このため、初行下部の「丁」字以下の「部曲空」の三文字

- 11 陳国燦（修訂本）『斯坦因所獲吐魯番文書研究』武漢大学出版社 一九九

七年一月 459頁

- 12 『斯坦因第三次中亞考古所獲漢文文獻』（非佛經部分）上海辭書出版社 二

〇〇五年八月

- 13 大阪府立圖書館編『恭仁山莊善本書影』（京都）小林寫眞製版所出版部 昭

和一〇年三月

- 14 （武田科学振興財団）杏雨書屋編『新修恭仁山莊善本書影』一九八五年五

月

- 15 金谷治『唐抄本鄭氏注論語集成』平凡社 一九七八年五月 371～378頁、王

素『唐寫本論語鄭氏注及其研究』文物出版社 一九九一年一月 143～145

頁、前掲注8拙著324～329頁参照。

- 16 ベルリン所蔵では、『漢書』を表、『史記』を裏とし、『西域考古圖譜』で

はその反対としているが、書写の状態からして天地界線、行野線を淡墨で

引き、ここに本文を填記している『漢書』抄写の面が表と見られる。『西

域考古圖譜』は書写した史籍の前後関係によって表裏の面を表記したもの

のように思われる。

- 17 Bd. 12. Chinesische und manjurische Handschriften und seltene Drucke

Teil 3. Chinesische Texte vermischten Inhalts aus der Berliner

Turfansammlung / beschrieben von Tsuneki Nishiwaki. Übers. von

Christian Wittern. Hrsg. von Simone-Christiane Raschmann. 2001

- 18 『西域考古圖譜』下巻 國華社 大正四年六月（柏林社書店 昭和四十七年

十二月 覆刊）

- 19 榮新江「德國『吐魯番收集品』中的漢文典籍與文書」（饒宗頤主編『華學』

第三輯 紫禁城出版社 一九九八年一月所収）

20 「吐峪溝」「庫木吐喇」の両語は、実際に別処で獲得したものを示す語であることも考えられなくはないが、獲得文書の内容、状態から見れば、両語の何れかが出土地の記録違いであると考えられる。

21 吐魯番地区文物管理所「柏孜克里克千佛洞遺址清理簡記」(『文物』一九八五年第8期)。なお、当報告書にはその録文のみで図版の掲載は見られない。当該の図版は、柳洪亮『新出土吐魯番文書及其研究』(新疆人民出版社 一九九七年四月)の473頁に掲載されている。

22 前掲注7羽田亨書557頁

23 龍谷大学佛教文化研究所編 龍谷大学善本叢書23(小田義久 責任編集)『大谷文書集成』参 法藏館 二〇〇三年三月

\* 本稿に関わる資料の調査に際し、天理図書館、武田学術振興財団附属「杏雨書屋」の各機関からは、貴重な所蔵品(『論語集解』断片、『論語』鄭玄注断片)の閲覧、実査を快くお許し頂き、また、同機関、並びに多くの調査機関の関係の方々から、温かなご支援を頂いた。

さらに、本稿の中で扱った断裂文書の接合に当っては、龍谷大学の小田義久先生、京都大学の西脇常記先生の御編著から、多大なご学恩を賜った。心からの感謝を申し上げます。

(ちょう なれい 総合教育センター)